

第3課 イントネーションの地域差

1 疑問文は上昇調？

一般に、疑問文は最後が上がると言われています。図1は東京方言の「何がほしい？」と「何かほしい？」の音調を表したピッチ図です。「何がほしい？」は「何」という疑問詞を含むWH疑問文、「何かほしい？」はほしいか、ほしくないかを尋ねるYes/No疑問文です。東京方言では、普通、どちらも最後を上げて発音します。

しかし、どの方言でも、疑問文の最後を上げるというわけではありません。図2は長崎市方言の「ナンノホシカト（何がほしい？）」と「ナンカホシカト（何かほしい？）」のピッチ図ですが、どちらも最後が下がっています。一方、図3の松本市方言を見ると、「ナニガホシイ（何がほしい？）」（ガは鼻濁音）では最後が下がり、「ナニカホシイ（何かほしい？）」では最後が上がっています。さらに、図4の福岡市方言では、「ナニガホシカナ（何がほしい？）」は少しずつ上がり、「ナンカホシカナ（何かほしい？）」は最後が下がっています。以上をまとめると、次のようになります。

文のタイプ	東京方言	長崎市方言	松本市方言	福岡市方言
WH疑問文	上昇調	下降調	下降調	漸次上昇調
Yes/No疑問文	上昇調	下降調	上昇調	下降調

長崎の人が東京の人と会話するときは要注意です。なぜなら、長崎の人が下降調で質問をしても、東京の人は質問されていると受け取らない可能性があるからです。従来、イントネーションに地域差があることはあまり知られていませんでしたが、コミュニケーション上は、アクセントの地域差よりもイントネーションの地域差のほうが重要かもしれません。

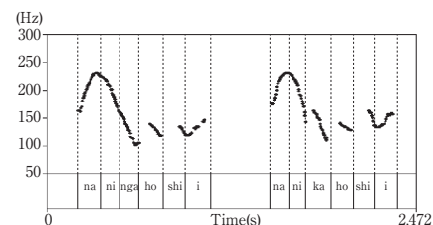


図1 東京方言

左：ナニガホシイ（何がほしい？）
右：ナニカホシイ（何かほしい？）

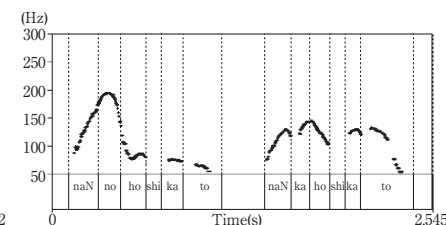


図2 長崎市方言

左：ナンノホシカト（何がほしい？）
右：ナンカホシカト（何かほしい？）

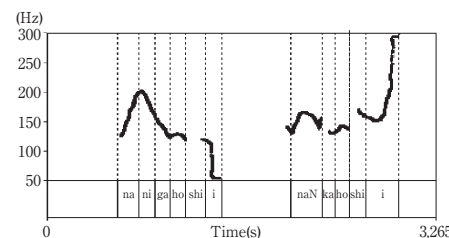


図3 松本市方言

左：ナニガホシイ（何がほしい？）
右：ナンカホシイ（何かほしい？）

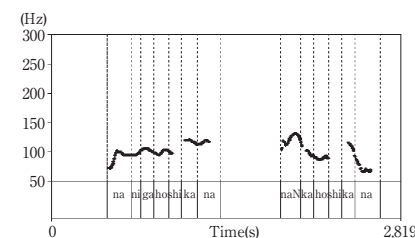


図4 福岡市方言

左：ナニガホシカナ（何がほしい？）
右：ナンカホシカナ（何かほしい？）

（「日本語音声」CDより。ピッチ図はPraatを使用して作成した）

2 新しいイントネーションの誕生と伝播

「それでエ↱、あたしがア↱」のように、文節の終わりの音を伸ばして、昇降調（上昇してから下降する）で発音するようなイントネーションを「尻上がりイントネーション」と言います（図5）。1970年代から、関東の若い女性を使うようになり、あっという間に全国に広がりました。「尻上がりイントネーション」の役割は、「それでネ、わたしがネ」、「昨日サア、行ったらサア」のような間投助詞の「ネ、サ」と同じで、文節の最後をきわだたせて、話がまだ続くことを表すことにあります。そのせいか、「尻上がりイントネーション」は「幼い、甘い、かわいい、軽薄」などの印象を人に与えるようです。